

書簡集

(明治41年)

夏目 漱石

書
簡
集

(明治四十一年)

一月八日（？） 牛込区早稲田南町七番地より 本郷区森

川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

拝啓 また御迷惑ながら明日早く来て野田先生のところへ原稿をもっていってくれたまわぬか。「坑夫」は諸君子妨害のためいっこう進歩せず。

一月十日（金）午後十一時―十二時 牛込区早稲田南町七番地より 本郷区森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はが

き]

拜啓　またお願いができ候。今日坑夫氏来りまた話を聞いたら僕の間違を発見した。シキと申すのは坑のことを、銅山の構内と思ひ違えてむやみに使つたから、大いに恐縮して正誤しようと思ふんだが、君もう一遍九浦先生のところへ行つて原稿を持ってきてくれたまえ。もつともシキという字の出初めは銅山へ着したすぐ前からだからこのあいだの原稿の仕舞しまいのほうになる。回数じゃちよつと分らないが、なんでも長蔵さんが坑夫に向つて「左がシキだよ」というところがある。そこからさきを貰つ

てきてくれればいい。これは仕舞のほうだからちよつと
持って帰っても野田君の迷惑にはならない。それから、
すぐ直してまた持っていつてもらいたい。どうもたびた
び君子を煩わし奉って恐縮千万。

一月二十二日（水）午後一時―二時 牛込区早稲田南町

七番地より 小石川区久堅町七十四番地菅虎雄へ

拝啓 その後は御無沙汰、小説がまだ濟ないんでどこ
へも出ない。時に僕例の胃病でちよつと医者に見てもら

つたら小便を試験してこれは糖分があるという、コイツにはまいったね。それで自宅には器械がないから糖分のペルセントを大学で調べてもらってくれるというんだがね。僕の療治法はそのペルセントで極きまるんだそうだ。そこでいろいろ頓む人も考えればあるが君の親類の人に見てもらってくれないかな。承知してくれるなら時間と日どりを極めて小便をビールの瓶に入れて大学へ持たせてやる。早いほうがこちらの便宜だ否や御回答を願います。

それから去月から病人ばかりで今は小供が口腔炎とかいうものを煩きって口が腫れてヒューヒュー泣どくいて気毒でたま

らない。この泣声をきくと小説が一枚も書けなくなる。そこへ妻が寐ねちまった。仕方がないから看護婦を二人また雇った。それでも雇えるだけが幸福だ。

君のうちの病人はいかが、お大事になさい。以上

二十一日

金之助

虎雄様

二月四日（火）牛込区早稲田南町七番地より 本郷区駒込西片町十番地滝田哲太郎へ

拝復 文学評論につき御申し訳承知いたし候。そろ 徹夜に
 ては恐れ入り候。適當のところにて御まとめ願ひ上げ候。
 虞美人草はすでにとくの昔より一冊もこれなし。先般
 御申込の節もすでに出払ひの姿に候さふらへばあしからず。

夏目漱石論が来月の中央公論に出るよし、いささか恐
 縮いたし候。先だつてじゅうよりだいぶ漱石論が出で申
 し候。もうたくさんに候。でき得うべくんば百年後に第二
 の漱石が出て第一の漱石を評してくればよいとのみ思
 ひをり候。

坑夫お気に召さぬよし、已やむを得ざる次第に候。九十六

回にて完結いたし候。もつとも東京朝日では祭日休刊を補ふため二回いっしょに載することあるゆるゑ九十三回くらゐにて終ることと存じ候。まづは右まで。

二月四日

夏目金之助

滝田樗陰様

二月十日（月）午後三時―四時 牛込区早稲田南町七番地より 芝区白金志田町十五番地野間真綱へ

拝啓 その後は御無沙汰、小生も小説をかいてしまう

とそのあいだにたまつた用事を片付けねばならず、片付けているとあとからすぐ雑誌やらなにやら追かけてくる。実に身体だけは閑で、ひまあたまは多忙を極めているのでついでどこへも出でず。昨日久しぶりじゆうにそうで十二社へ行ってそれから銀世界を回って帰ってきた。梅は二三本開いていた。

妻君を国へお歸しのよし承知、それで地方へ出かせぎの件も承知。小島へ依頼の件も承知、万事承知いたし候。これからこの墨で手紙を十数通（端がきとも）かく。そのうちで小島氏へも認めるところなり。

坑夫は面白いよし。面白ければ難あるがた有い仕合せ。虞美人草はわからぬよし、これは少々困ったことなり。もう少し賞ほめてもらいたい。高田が報知でほめてくれた。逢った時はよろしく願います。

今度の木曜に来るなら皆川君と来ぬか。(午後より) 晩には宝生新が来て謡をうたってみんなにきかせるはず。君謡がきらいなら仕方がない。

野村のうちは多勢お客があるそうだ。以上

二月十日

夏目金之助

野間真綱様

二月十六日（日）午後三時―四時 牛込区早稲田南町七

番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

拝啓 青木健作氏論文拝見いたし候。ホトトギスへ掲載の儀はいかやうにてもよろしかるべきか、ぜひともおせるべきほどの名論文とも存じ申さず。しかし載せてはホトトギスの資格に害を与ふるとはむろん思ひ申さず候。昨日青年会館にて演舌えんぜつ今日これを通読、問題が大いに似たるところ（ママ）これあり興味を感じ申し候。以上

二月十五日

夏目金之助

高浜老兄

三月十三日（金）午後五時―六時 牛込区早稲田南町七
番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ〔はがき〕
今日の俳諧師はいかいしはすこぶる上出来に候。あへて一葉を呈
して敬意を表す。頓首

三月十四日（ママ）

三月十六日（月）午前十一時—十二時 牛込区早稲田南
町七番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ「は

がき」

やぶかうじ

藪柑子先生「伊太利人」と申す名作を送り候。木曜に

いで

お出なければ締切に間に合ふやう取りにお寄よこしか、こ

ちらよりお送りいたすことに致し候。小生演説は明日く
らゐから取りかかる考へに候、今夜御都合にて「二字不
明」衣御懐中しかるべく候。

三月二十四日（火）牛込区早稲田南町七番地より 麴町

区富士見町四丁目八番地高浜清へ

できるならば一欄に組んでいただきたいと思いま
す。

題は作家の態度と致しておきましょう。

拝啓 たぶん明日はできるだろうと思います。十九字
詰十行の原稿紙でただいま二百五十枚ばかりかいており
ます。たぶん三百枚内外だろうと思います。明日書きお
わって、一遍読み直して、差し上げたいと思います。な
んだかごたごたしたことができて、少々ひまをつぶしま

す。頭がとぎれとぎれになるものだからたいへんな不経
済になります。頓首

二十四日

金之助

虚子様

お風邪はいかがでございますか。

四月十二日（日）午後零時―一時 牛込区早稲田南町七
番地より 京橋区滝山町四番地東京朝日新聞社内 中村蒨
へ

尊書拝見、ホトトギスは五部ほどもらひたれど来る人がみな持ち去りてただいま一部余りをるものを昨日芥舟先生に進呈する約束をしたるゆゑ今は小生の分（誤植を正したる）もののみ手元にこれあり。せつかくゆゑ社のほうへ申しつかはし申すべし。しかし残部あるやいなや分りかね候さふらふあひだその辺は御容赦を願ひ候そろ。それから毎月送ることについてはこれまで僕が二部づつもらつてゐるからその一部を君のほうへ回すことにしたらよからうと思ひ候。これも社のはうへ依頼いたしおき候。

森田先生は一昨日小生方を引き払ひ下宿したり。牛込

築士八幡前町二十四植木屋方に候。これは同学の高辻法つくどはちまん学士の寓居にて同君が親切に自分のほうへ来いといふからにて候。こんな時には趣味嗜好の友達よりも人間としての友達のはうが有益なるものと存ぜられ候。高辻氏は基督教のよし、ただし文学はいつさい知らぬ男なるべし。

春雨蕭々日来小閑を得て二三無沙汰見舞をなしをり候。大阪の素川氏またまた来阪を促がす。なかなか上方かみがたの花などを見てゐるわけにまゐらず候。

先だつてある書生が書を寄せて漱石の小説はまとめて読むべきものなり。新聞にて日々読めばつまらぬゆる漱

石の名を損するのみ早く退社せよとありたり。小生もしごく御同感にござ候。しかし退社して単行本ばかりでは食へないからやはり新聞小説をかくつもりに候。

同書生また曰くいわよろしく悠々自適の生活を送るべしと。これもしごく賛成に候。しかし金をやるからともなるともなきのみならず本人自身大の貧乏書生にて文を売る口を周旋してくれといはぬばかりの口吻こうぶんなり。

小生この人に朝日新聞の小説欄を譲るべきか。呵々

四月十二日

夏目金之助

中村翁様

五月六日（水）午後六時―七時 牛込区早稲田南町七番

地より 本郷区森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

拝復

あの女はほかに行くところがきまつてゐるよし御失望
 お察し申し候さふらへども一方にては大いに賀すべきことに
 候。学校を卒業もしないうちからさう万事が思ひどほり
 に運んでは勿体もつたいなすぎます。さうして人間が一生グウタ
 ラになります。勝者は必ず敗者におは了るものにござ候。こ
 とに金や威力の勝者は必ず心的の敗者に了るが進化の原

則と思ひ候。まづは右御祝辞まで。草々頓首

五月六日

金之助

豊隆様

五月十一日（月）午後五時―六時 牛込区早稲田南町七

番地より 本郷区駒込西片町十番地大塚楠緒へ

拝啓 お手紙拝見いたし候。先月中よりお病気の趣は
 じめて承知、ことに御軽症にてはなき御容子切に御加養
 を祈り候。新聞のはう御心配に及ばず。小生どうせ一両

日中に渋川氏へ参るつもりにつき面会のうへ万事同氏へ相談いたしおくべく候ふにつき御介意なく御療養しかるべしと存じ候。もし御転地先にて御徒然のあまり御執筆の運にも至り候へば好都合と存じそれのみ祈りをり候。

そらだきは文章に御苦心のやうに見受け申し候。趣向はこの後いかが発展いたし申すべきや。御完結のうへならではと存じすべて差控^{さしひか}へ申し候。

藤村氏のかき方はまるで文字を苦にせぬやうな行き方に候。あれも面白く候。なんとなく小説家じみてをらぬところ妙に候。しかしある人はその代り藤村じみてをる

と申し候。あれも長きものゆゑ万事は完結後ならではと
かく申しかね候。

さし絵お気に入らぬよし残念に候。しかし普通の新聞
さし画えはまああんなものじゃありませんか。

転地はどこへなさいますか。あんまり小田原近所だと
かえって肺病に危険だからよせと医者からいわれた人が
あります。あなたのは肺炎だからさほど伝染の心配はな
いでしようが、まあなるべく安全な所へ入らっしゃい。

この手紙は候文と言文一致の相の子のであります。

頓首

五月十一日

金之助

大塚楠緒子様

一週間に一返手紙をよこせとか毎日よこせとかいって
いちじく無花果を半分ずつ食うところがありましたね。あすこが
 面白い。今マデノウチデイチバンヨカッタ。

五月十八日（月）午前九時—十時 牛込区早稲田南町七
 番地より 本郷区森川町一番地小吉館小宮豊隆へ
 啓

とんだ夢を御覧になつたものに候。あんな夢はかいてくるに及ばず候。近ごろのやうになまけてゐては駄目に候。もう少し勉強をなさい。

坑夫の校正はたいいてよろしく候。少しくらゐる誤植があつても平氣に候。読む人はなほ平氣に候。

大塚さんのそらだきが好評嘖々さくさくのよし社より報知これあり。まづもつて安心いたし候。池辺主筆曰くあれはなかなかうまいですねと。池辺主筆すらうまいといふ。読者の歓迎するやもつともなり。

おひおひ短編をちよいちよいかくつもりに候。

筆はルイレキのよし、たびたび御面倒にござ候。うまいものを食はせて夏は海岸へでもやらうかと存じ候。

妻君いまだ臥床がしょう困り入り候。いい加減に死んでくれぬかと相談をかけ候ふところなかなか死なないよしにてただちに破談に相成り候。

サランボーといふものを読みをり候。瑰麗無比かいらいむひのものに候。なかなかうまいものに候。フローベルは両刀使ひに候。エラク候。今夜寐しなにお手紙をかき候。これも入らぬことに候。ただ筆が持ちたくなつたからに候。草々以上

五月十七日

金之助

豊隆様

六月三日（水）牛込区早稲田南町七番地より 松根豊次

郎へ「大正六年二月二十日発行「渋柿」より」

昨夜お出いでの時には少々無言の業を修しかけをり候ふた
めさだめて無愛嬌のことと存じ候。談話はいかなる場合
にても埒らちなきものに候。時々は相對無言のはうはるかに
面白く候。貴意いかがにや。

短夜^{みじかよ}を交^{かわ}す言葉もなかりけり

六月九日（火）牛込区早稲田南町七番地より 高須賀淳

平へ「六月十一日「国民新聞」より」

（前略）俳諧師十風夫婦の段はあへて江湖に推挙いたしたく候。女郎上りの細君の性格をかいてかやうに活躍せるもの明治にあつてまさに空前に候。しかしてその夫の十風なるものもまた非凡の出来^{でき}に候。世間に振はぬのは情なく候。世間が読まないかと存じ候。俳諧師は筋の纏

った読物にてはあるまじく三蔵一代記のやうなものなる
 べくと存じ候。小生視^みるところによれば今日までの出来
 栄は二葉亭の平凡以上と存じ候。ただし十風夫婦北海道
 へ参りたる今日小光とかいふ女^{おんな}義太夫^{だゆう}が十風の細君の
 ごとくうまく描き出さるるかが問題に候。もし小光が面
 白く写し出されたらばまたまた三蔵一代記中の好波瀾^{こうはらん}と
 存じ日々楽しみに愛読いたしをり候。以上

六月九日

金之助

淳平様

七月一日（水）午後三時―四時 牛込区早稲田南町七番

地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

拜復 小光はもつとさかんにお書きになつてしかるべく候。決して御遠慮なさるまじく候。今消えては大勢上不都合に候。鼠骨そこつでも今日の弥次郎兵衛のところは氣に入ることと存じ候。「文鳥」十月号に御掲載くだされ候へば光榮の至りと存じ候。十月なれば東朝へ承諾を求むる必要もこれなかるべくと存じ候。文鳥以外になにかできたら差し上ぐべく候へども覚束なく候。ドーデのサツフォーといふ奴をちよつとお読みにならんことを希望い

たし候。名作にござ候。俳諧師の著者には大いに参考に
なるだらうと存じ候。

今日きょうの能楽堂例により不参に候。明日御令兄宅の御催
し面白さうに候。ことによれば拝聴まかに罷り出いづべく候。

小生夢十夜と題して夢をいくつもかいてみようと思ひ
候。第一夜は今日大阪へ送り候。短かきものに候。御覧
くだされたく候。盆につき親類より金を借りに参り候。

小生から金を借りるものにかぎりつひに返さぬを法則と
致すやに存ぜられはなはだ遺憾に候。おれが困ると餓死
するばかりで人が困るとおれが金を出すばかりかなあと

長嘆息を洩らしここに御返事を認めしたた申し候。頓首

七月一日

鮫あんこうや小光が鍋にちんちろり

金

虚子先生

座右

七月四日（土）午前十一時—十二時 牛込区早稲田南町
七番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

拜啓　またよけいなことを申し上げて済みませんが、
 小光入湯のところは少々綿密すぎてくださ敷しくはありま
 せんか。小光をも描かず小光と三蔵との関係も描かず、
 いわば大勢に関係なきものにてただ風呂桶に祇徊ていかいしてい
 るのではありませんか。そうしてその祇徊がそれ自身に
 おいてあまり面白くない。どうか小光と三蔵と双方に関
 係あることでだんだん発展するように書いていただきた
 い。そうでないと相撲にならない。妄言　多罪　頓首

四　日

金　之　助

虚子先生

七月十一日（土）午後十一時―十二時牛込区早稲田南町

七番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

拝復

おふささんは異存はなかろうと愚妻が申します。しかし松根がもらいたいのですかあなたが御周旋になるのですか伺ってくれと申します。

おふささんは妻のイトコです貧乏です。支度もなにもありません。以上

七月十一日

金

虚子様

七月十二日（日）午後十一時―十二時 牛込区早稲田南

町七番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

又啓

あなたがこの事件で歩をお進めになればしぜん松根に直接意見をきくことになります。そうすると公平を保つために私のほうでもお房さんにそのことを話さなければなりません。すなわちあなたの思いつきで松根に向って

お房さんをもらわれないかと口をかけるよしと通知するの
であります。それで本人が否いやだというたらすぐ無駄なお
骨折を御中止を願います。また異存なしと答えたらなに
ぶんにも御面倒を願いましよう。ただいま愚妻管守につ
き帰り次第お房さんの考をきかせますからさよう御承知
を願います。頓首

七月十二日

金之助

虚子先生

七月十四日（火）午後一時—二時牛込区早稲田南町七番

地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

謹白

「私は無教育でありましてとうてい高等の教育を受けた人の奥様になる資格はありませんが——もう一年も仕事でも勉強して——」

お房さんがこんなことをもしくはこれに類似したことを愚妻まで申し出たそうです。これによってこれを観ると謙遜のようにもあり。いきたいようにもあり。ちよつと分りませんな。しかし否いやではないんでしよう。その手詰てづめ

に決答を逼るせま必要もないから愚妻はよくお考えなさいと申したら、お房さんはよく考えてみますと申したそうであります。

右は小生の直接研究にこれなく候えどもだいたいの見当は間違った愚妻の報知とも思われません。

右まで。草々

七月十三日

金

虚子先生

七月二十七日（月） 午前十時—十一時 牛込区早稲田南

町七番地より 愛媛県温泉郡今出町村上半太郎へ

酷暑の砌みぎりいよいよ御清勝賀し奉り候。小弟無異碌々ろくろくとして消光、御休神くださるべく候。拙作御所望にあづかり汗顔、ただいま東朝に「春」と申す長編掲載了のあとを引き受けることに相成り九月初めより両新聞にまたまた顔をさらす始末にてただいま腹案を調ととのへ中三四日中に執筆に取りかかりたしと存じをり候へどもなんだか漠然として取り留めなく自分ながら恐縮の体ていにござ候。掲載のうへはなにかと御助力にあづかりたしと存じ候。

近来俳句を作らず作らうとしてもできかね候。道後の温泉へでも浸ひたらねば駄目と存じ候。

まのあたり精霊来たり筆の先

七月二十七日

金

霧月老台

座右

七月三十日（木）午後十一時—十二時牛込区早稻田南町七番地より 佐世保市港町四十一番地石井方鈴木三重吉へ

お手紙拝見、東京の暑はたいへんなものでこの二三日は非常に恐縮して小さくなっている。それでも堪らないから時々湯殿へ行つて水を浴びてようやく凌いでみたがすぐからだがほてつて気が遠くなつてしまふ。そこへもつてきてエルドマン氏のカントの哲学を研究したものだから頭がだいぶ変になつた。どうかトランセンデンタル・アイに変化してしまいたいと思う。

小宮からも手紙が来て君と停車場で落合げきりんつたとかいてある。なんでも洋服屋の小僧に逆鱗げきりんしていたとかいてあつた。小説をかかなければならない。八月はうんうんい

って暮すわけになるが、まあ命に別条がなければいいがとひそかに心配している。君の手紙や小宮の手紙を小説のうちに使おうかと思う。近ごろはだいぶずるくなつてなんぞという手近なものを種にしようという癖ができた。

小宮ノ婆さんは達者なのだそうだ。風邪でも引いて寝ていてくれなければせつかく帰った甲斐がないといつてきた。

藩主の弟が死んで今日は市ヶ谷から染井まで香炉持に雇われたと東洋城からいつてきた。今日は君たいへんな

暑さだ。東洋城が途中でひっくり返りはしないかと思う。おおかた神主の服装を着て行ったのだろう。神主の服に夏服があるかな。

あまり暑いからこれで御免蒙る。艸々頓首

七月三十日

金

三重吉様

七月三十日（木）午後十一時―十二時 牛込区早稲田南
町七番地より 福岡県京都郡犀川村小宮豊隆へ

拜啓 道中の手紙も着の手紙も到着拜見。お婆さんの御無事のよし結構に存じます。第一銀行の株はその後また下がったようだよ。東京は熱いことおびた夥だしい。水を二三度浴びている。明後日あたりから小説をかく。君や三重吉の手紙もことによつたらなかへ使おうかと思う。家内無事、妻君のお腹はだんだん拡張。筆はブツブツができて貧民の餓鬼のようである。猫がむやみに反吐へどをはいて始末がわるい。森田草平横寺町正何とか院へ転居。東洋城香炉を捧げてお葬とむらいに染井まで行く、藩主の弟が死んだのだそうだ。

割合に蚊が少なくて凌ぎいい。夜この手紙と三重吉への手紙とそれからもう一本かく。

珍らしく近所で義太夫を語っている。なんだか分らない。負けない気で謡でもやろうと思うが一人では心細いから虚子先生を待っている。艸々そうそう

木曜の晩

七月三十日

金之助

豊隆様

月日不詳 牛込区早稲田南町七番地より 京橋区滝山町

四番地東京朝日新聞社内渋川柳次郎へ〔封筒なし〕

題名——「青年」「東西」「三四郎」「平々地」「^{ママ}

右のうちお扱えらみくだされたく候。小生のはじめつけた名は三四郎に候。「三四郎」もつとも平凡にてよろしくと存じ候。ただあまり読んでみたい気は起り申すまじくとも覚え候。

（田舎の高等学校を卒業して東京の大学にはいった三四郎が新らしい空気に触れる。そうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触して、いろいろに動いてくる。手間てまは

この空気のうちこれ等の人間を放すだけである。あとは人間がかってに泳いで、おのずから波瀾ができるだろうと思う。そうこうしているうちに読者も作者もこの空気にかぶれてこれ等の人間を知るようになることと信ずる。もしかぶれ甲斐のしない空気で、知り榮ぼえのしない人間であつたらお互に不運と諦めるより仕方がない。ただ尋常である。摩訶不思議はかけない。) 以下を予告に願います。

渋川様

金

八月十九日（水）午前十一時―十二時 牛込区早稲田南

町七番地より 麴町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

御書面拝見。朝日への短編つひにお引受ひきうけのよし敬承、

御多忙中さぞかし御迷惑と存じ候。しかしこれにて渋川君は大なる便宜を得たることと存じ候。

今日「三四郎」の予告出で候を見れば大兄の十二日の玉稿いかにもつなぎのやうにて小生は恐縮いたし候。まったく大阪との約束上より出でたることと御海ごかい願じよひ候。「春」今日結了最後の五六行は名文に候。作者は知

らぬことながら小生一人が感心いたし候。ついでをもつて大兄へ御通知に及び候。あの五六行が百三十五回にひろがったらたいしたものなるべくと藤村先生のために惜しみ候。

昨紅緑来訪、久しぶりに候。紹縮緬ろちりめんの羽織に紹の襦袢じゆばんをつけ候。なかなか座付ざつき作者然としたる容子に候ひし大兄を訪ふよし申しをり候参りしや。暑気雨後に乗じ捲土けんど重来ちようらいの模様小生の小説もいきれ申すべきか。草々

八月十九日

金之助

虚子先生

九月十四日（月）午後零時―一時 牛込区早稲田南町七

番地より 府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊
一郎へ「はがき」及び赤坂区松根豊次郎、広島市鈴木三重

吉、本郷区小宮豊隆へ各一通

辱^{じよくち}知猫儀久々病氣の処^{ところ}、療養不相叶^{あいかなわず}、昨夜いつの間

にか裏の納屋のヘツツイの上にて逝去致候。埋葬の儀は
車屋をたのみ蜜柑箱^{みかん}へ入れて裏の庭先にて執行^{つかまつり}仕候。
但し主人「三四郎」執筆中につき、御会葬には及び不申^{もうさぞ}
候。以上

九月十四日

九月十六日（水）午後零時―一時 牛込区早稲田南町七

番地より 下谷区谷中清水町五番地橋口清へ

拝啓 草合くさあわせお蔭にてやうやく出来、御尽力謝し奉り

候。

表紙奇麗にかつ丈夫さうに見え候。結構にござ候。

扉「坑夫」のはうははなはだ面白く拝見いたし候へど
野分の結婚のはうは少々不出来と存じ候。大兄御自身の

御考えはいかがに候ふや。有体ありていを申せばあのほうは増版の時になんとか御再考を願はんと我儘わがままなことを希望いたし候ふがどうでせうか。

小説すみ済しだい参上、御礼申し上ぐべく候。

インキ壺の中の銀ツボの義その道のものの説を承うけたまはり候ふところやはり腐食の憂へこれあるよしエナメルでも掛けるわけにはいかぬものにや。もしかついでもこれあり候はば御相談願ひ上げ候。貢様へよろしく。以上

九月十六日

金之助

橋口様

十月（？） 牛込区早稲田南町七番地より 日本橋区本町
三丁目博文館「中学世界」へ 「応問 十一月二十日発行
「中学世界」より」

小生の号は、少時蒙求もうぎゆうを読んだ時に故事を覚えてさ
つそくつけたもので、今から考えると、陳腐で、俗気の
あるものです。しかし、いまさら改名するのも億劫だか
ら、そのまま用いております。慣れてみると、好すきも嫌い
もありません。夏目という苗字と同じように見えます。

十一月二十三日（月）午前十一時―十二時 牛込区早稲

田南町七番地より 千葉県成田町横町黒川方鈴木三重吉へ

お手紙拝見。仰おおせのごとく文学評論で大弱りの状態、

しかもくだらぬ労力ゆゑつくづくいやになり候。この分
にては当分成田行も駄目に候。

東京は日々好天気、小春うれしき日向なり。新小説は
お見合せのよし残念に候。なんでも書いたらよからうと
思ひ候。

草平氏相変らず煤烟ばいえんに腐心。文壇の現況に憤慨来年は

大いに評壇を賑はすと申しをり候、いかがにや。横丁の先生もちと御奮発ありたく候。先日お能を久しぶりにて拜見、なかなか退屈のものにて候。その時秋声君に紹介され候。子供まだじよく蓐しよくを離れず。細君の腹いよいよせり出せり。夫子ふうしフラネルの腹巻す。

右の条々まで

十一月二十二日

金之助

三重吉様

十二月十九日（土）午前十一時—十二時牛込区早稲田南

町七番地より 千葉県成田町吾妻屋鈴木三重吉へ

またまた御転宅のよし承知いたし候。学校さだめて御多忙のことと存じ候。休みには泊りがけに御出京しかるべく候。先だつて泥棒はいる。両三日前赤ん坊生る。これにて今年も無事なるべきか。文壇紛々ことごとくこれ空洞の響なり。壇上の人また遊戯三昧と心得て一生を了し得べし。馬鹿々々しきことを馬鹿々々しく思いつつ真面目に進行さすること遊戯三昧の境に達せざる時は神経衰弱となり喪心失気となる。天寿惜しむべし。閑日月を

抱いて齧齧あくせくの計をなす。可かならずとせんや。草々

十二月十九日

金

三重吉様

十二月二十日（日）午後零時—一時牛込区早稲田南町七

番地より 本郷区森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

先だつての論文を出すなら新聞ではとうてい載せ切れ
まい。雑誌がよろしかろう。新らしく書くなら新聞でも
差支さしつかえあるまじ。

あんまり僕をたよりにすべからず自分の考かんがえを自分で書いて漱石なにかあらんと思うべし。早稲田のあるものの書いたものは驚ろくべく愚なり。あれは生活難のために先輩の指導を受くる余裕なきによる。ああならぬ君は幸福なれど余裕あるがために万事僕に見せてからのなんの思索するは独立心なきことなり。これでよいと自己で自己を極きめる分別ありたきものなり。

文壇に出る一步は實際的ならざるべからず。今の愚なるものに分りやすく、読みやすく、相手になるように見

えて、侮りがたき思おもいを起さしめざるべからず。したがって論旨は短からざるべからず、興味は時事問題ならざるべからず、その他いろいろの資格なかるべからず。これを重ねてゆくうちにおのずから大いなる根底ある議論を出しても人が読むようにも耳を傾けるようにも（今のように生活難と党派心が盛さかんではそれでもむずかしい）なる。はじめから偉いものを書いたって人は相手にしない。相手にするものは日本に五六人しかいない。そしてその五六人はみんな黙って相手にしているのみである。

文壇に立つものはあらゆる競争排擠はいせいに伴ふ墮落的行動
 に対して従容事を弁ぜざるべからず。もし清きをもつて
 みづからをり高きをもつてみづから処せんとせば一日も
 留まるべからず。

文壇の諸公皆賢なるにあらず。また正なるにあらず。
 しかして賢のごとく正のごとくに見せる術を日夜に講じ
 つつあり。憤いきどおるべからず。社会が胡魔化される程度に
 あるがためなり。傍観すべからず。社会は進む期なし。

今の文壇に立つものより生活難を引き去れ彼等らの十中七八は喜んで文壇を引き上ぐべし。彼等は文壇に立ちながら苦悶しつつあり。

君もし以上の諸件を承知のうへならば筆を執るも可なり。ただ一時虚子の依頼にて出来心よりするは人魂のふわつく姿なり。それにてもし人魂をもつて任ずるがいやならばはじめからその覚悟をせざるべからず。

今の自然派とは自然の二字に意味なき団体なり。花袋、

藤村、白鳥の作を難有ありがたがる団体をいふにほかならず。しかして皆恐露病かかに罹る連中にほかならず。人品をいへばたいてい君より下等なり、理屈をいへば君よりも分らずや多し。生活をいへば君よりも甚しく困難なり。さるがゆゑに君のあへて為しあたはざるところいひあたはざるところを為す。君これ等の諸公を相手にして戦ふの勇氣ありや。君をこの渦中に引き入るるに忍びざるがゆゑにこの言あり。以上

十二月二十一日

夏目金之助

小宮豊隆様

日本文学電子図書館

「書簡集」(明治41年)

著者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 第5巻」角川書店
昭和42年10月10日6版発行

日本文学電子図書館